

月刊

地域保健

7
2013

●特集

震災とアルコール関連問題

●フロントランナー

吉峯悦子さん 〈長崎市 市民局 福祉部 理事（施設運営連携担当）〉

●ピープル

堺野米子さん 〈生活評論家、薬剤師〉



吉峯 悅子

●

長崎市 市民局 福祉部 理事（施設運営監査担当）

大切なのは生活者の目線に立つて寄り添うこと

被爆者支援で知った行政保健師の役割



長崎という地名で連想するのは——

出島、カステラ、グラバー園、そして平和祈念像、長崎の鐘。今月のフロン

トランナーの舞台は異国情緒が漂い、今なお被爆の悲しみを抱える長崎市だ。

吉峯悦子さんが生まれたのは大村湾

を挟んで長崎市の北に位置する佐世保市。アメリカの原子力空母エンタープライズが佐世保港に入港したときの大騒ぎ（激しい抗議行動でデモ隊と機動隊がぶつかった）は、子どものころの記憶として残っている。

三人姉妹の真ん中。上と下に挟まれて親の目が届きにくいのをよいことに自由気ままに育つた。小学校では「あまり落ち着きがない子どもさんですね」と言われていたという。

将来の進路を決める高校生になると、家庭に入るよりは一生の仕事を持ちたいと考えた。当時の女子学生の選択肢といえば教員か看護職。たまたま

近所のおばさん（親戚ではない）に保健所の保健師がいたこともあり、漠然と保健師になることを思い描いた——

でも、保健師が何をする人なのかいまひとつよく分からず、とにかく家を出たかったというのが一番大きな理由らしい。

しかし家を出るにしても、大学進学は経済的に厳しく、選択肢はおのずと寮があり授業料も免除される看護学校に絞られた。なおかつ女子なので親から「親戚が住んでいる地域に限る」との条件が出されて選択肢はさらに減少。最終的に熊本の看護学校へ進むことになった。

看護学校時代の思い出

せっかく入学した看護学校だったが、ひと月もするとホームシックにかかりた。ある日突然、教科の先生に「家に帰りたいので（鉄道の）学割を発行

してください」と頼み込んだという。言われた先生もびっくり。

「思い立つたらすぐ動く、周りの人や先のことをあまり考えない子でしたから。先生に『それなら、きょうじやなく土日に帰つたら』となだめられ、それで治まりましたけど（笑）。最初はそんなこともありましたが、看護学校の寮生活は楽しい思い出でいっぱいでした。学校に併設されていたので、冬は寮の中の教室で丹前を羽織りながら授業を受けたり、みんなで工夫しておいしい料理をつくったりしたのを覚えています。そのころの友達とは今でも付き合っていますし、同級生たちの多くは国立病院や大学病院の看護師長になっています」

入学前から夜勤のある看護師は選択肢の中に入っていたなかつたので、卒業後は長崎市の保健師学校へと進んだ。

東日本大震災の被災地でアルコール関連問題が持ち上がっている。もともとあったアルコール依存症が仮設住宅転居にともない露見、再飲酒するようになったケースが多く、アルコール関連問題は被災地における心の問題の中でもとりわけ困難とされる。特集では、被災地のアルコール関連問題に深くかかわってきた東北会病院の石川達院長へのインタビューをはじめ、岩手県大船渡市に早くから入っていた「久里浜こころのケアチーム」の活動、岩手県釜石市における医師を中心とした活動、宮城県気仙沼市の取り組みを紹介。さらに発災後18年が経過した阪神・淡路大震災における同問題のまとめを報告する。

P12 震災をきっかけに問題が顕在化

—東北会病院・石川達院長に聞くアルコール関連問題の現状
◎インタビュー 石川達 東北会病院院长 聞き手 編集部

P19 東日本大震災被災地域でのアルコール依存症者支援の試み

—岩手県釜石市における支援活動から
◎森川すいめい（認定NPO法人 世界の医療団）

P26 支援のキーワードは「つながる」

—宮城県気仙沼市本吉地区の取り組み
◎鈴木由佳里（気仙沼市本吉総合支所保健福祉課）

P32 岩手県大船渡市における「アルコール問題」の医療活動

—東日本大震災・久里浜医療チーム（こころのケアチーム）の活動から
◎藤田さかえ（独立行政法人国立病院機構久里浜医療センター）

P39 震災後の活動は日常活動の延長にある

—阪神・淡路大震災の経験から
◎藤本俊治、幸地芳朗（兵庫県立光風病院）

特
集

震災と アルコール 関連問題





「寄り添い、共に歩む」が 目標

今は「10年後の自分づくり」をしています

やまざき なおりみ
山崎奈緒美さん

●柏市保健所
地域健康づくり課



文=編集部 写真=C.Kent

柏市は、1950年代から東京のベッドタウンとして急速に発展した中核都市。駅周辺にはデパートやショッピングセンターが集まり、たくさんの買い物客や学生たちでにぎわっています。山崎奈緒美さんが勤める柏市保健所（ウエルネス柏）は、駅から徒歩で30分くらい離れた、自然豊かな場所にあります。今回は山崎さんに、保健師として3年目の等身大の気持ちをお聞きしました。

30分くらい離れた、自然豊かな場所にあります。今回は山崎さんに、保健師として3年目の等身大の気持ちをお聞きしました。

「でも大学では、保健師の教育にも力を入れていたのです。保健師の先生が講義をする地域保健学の授業はいつもキラキラ輝いていて、『保健師の仕事って、こんなにすてきなんだよ!』って、すごく楽しそうにお話ししてくださいました。まるでミュージカルの一場面のようにセリフを織り交ぜながら、踊る大会の直前に骨折したことで大会に出られなくなってしまい、悔しい思いをしました。そんなとき親身になつて相談にのってくれたのが、養護教諭の先生でした。「こんなふうに、人の力になることができます。お母さんの悩みつてどんなことが多いのでしょうか。

りしています。田中地域は出生率が高く、月に40人くらい生まれるのだそうです。柏市全体では毎年3300件くらいですから、子どもが多い地域だということが分かります。

ところで、お母さんの悩みつてどんなことが多いのでしょうか。

山崎さんは、最初は保健師でなく養護教諭になりたかったそうです。高校3年生のとき、部活動のバレーボール大会の直前に骨折したことで大会に出られなくなってしまい、悔しい思いをしました。そんなとき親身になつて相談にのってくれたのが、養護教諭の先生でした。「こんなふうに、人の力に

なれる人になりたい」という気持ちが日に日にふくらみ、それが将来の夢に変わり、養護教諭一種の免許がとれる杏林大学に進みました。

山崎さんは、学生のころは人見知りしていました。でも、専門職としてアドバイスでいることもあります。自分が教えるとより、一緒に考える感覚でいいのではないかと思っています」

大学の授業の中で、人のために働く場として「地域」があることを知った山崎さんは、保健師へと方向転換し、卒業後は、実家に近い現在の職場を選択しました。今は主に母子保健担当で、柏市内に20カ所あるコミュニティー地区のうち「田中地域」というところを受け持ち、子どもの成長の確認をしたり、お母さんの育児の悩みを聞いた



▲大学の講義を聴いて、保健師になりたくなりました

視野をもっと広げたい

山崎さんは、学生のころは人見知りで、人と話すときも目を見て話せなかつたりすることもあったとか。でも今は、人とのかかわりが楽しくて仕方がないと言います。

「自分でも意外だったのですが、訪問で、ただ、3年目だからこそその悩みも、ちょっと出てきました。

最近、「考え方が単一になつてきていた」と感じているのだそうです。以前はもつと広い視野で見ていたのに、他のところに目がいかなくなつてしまつたのです。お母さんと一緒にいるお母さんも、中にはいると思いま



▲午後からの健診の準備で大忙し

「子どもの成長について、たとえば『夜寝つきが悪い』『ミルクを飲まない』『もう1歳を過ぎているのに言葉がゆづくりで心配』といったことで悩んでいる人が多いですね。それから『私がこんなにがんばっているのにご主人が手伝ってくれない』『イライラしてしまうのでお子さんがあたつてしまいそう』などと、お母さんが自身が神経質になつていることも少なくあります。私はまだ結婚もしていませんし、子どももいません。そんな私にアドバイスされても、『心もとな』と感じているお母さんも、中にはいると思いま

「でも大学では、保健師の教育にも力を入れていたのです。保健師の先生が講義をする地域保健学の授業はいつもキラキラ輝いていて、『保健師の仕事って、こんなにすてきなんだよ!』って、すごく楽しそうにお話ししてくださいました。まるでミュージカルの一場面のようにセリフを織り交ぜながら、踊る大会での出来事を説明してくださいました。今もいました。(笑)。先生たちの講義を聴いているうちに、ぐいぐい保健師の魅力に引き込まれていったのです」

大学の授業の中で、人のために働く場として「地域」があることを知った山崎さんは、保健師へと方向転換し、卒業後は、実家に近い現在の職場を選択しました。今は主に母子保健担当で、柏市内に20カ所あるコミュニティー地区のうち「田中地域」というところを受け持ち、子どもの成長の確認をしたり、お母さんの育児の悩みを聞いた